

教員名	鈴木 禎宏 (SUZUKI Sadahiro)
所 属	生活科学部人間生活学科生活文化学講座
学 位	博士号 (学術) (2002年 東京大学)
職 名	助教授
URL/E-mail	http://hikaku.aesthe.ocha.ac.jp/~hp/ssuzuki@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

生活造形論 / 民芸運動史 / 生活の芸術化、芸術の生活化 / 対抗産業革命論 / British Studio Pottery

◆主要業績

総数 (2) 件

- ・『バーナード・リーチの生涯と芸術 「東と西の結婚」のヴィジョン』(ミネルヴァ書房、2006年)
- ・「民芸運動とバーナード・リーチ」、熊倉功夫、吉田憲司共編『柳宗悦と民藝運動』(思文閣出版、2005年 P164-P182)

◆研究内容

専門分野：

比較日本文化論/比較文学比較文化、生活造形論

主な研究課題：

- 1 二〇世紀イギリスの工芸 (Studio Pottery を中心に)
- 2 近現代日本の工芸 (民芸運動ほか)
- 3 その他日本とヨーロッパを軸とする比較文化論 (例えば、昭和初期の日本における「世界」観など)

所属学会等：

日本比較文学会 美術史学会 ジャポニズム学会 東大比較文学会 文化資源学会 デザイン史フォーラム 民族芸術学会

◆教育内容

主な担当授業科目

(学 部) 比較生活文化論、比較生活文化論演習、比較生活文化史 I、生活造形論ほか

(大学院) 比較文化論、比較生活文化特論、生活造形特論、生活芸術論

学部4年間を通じ、「自分で問題をみつけ、その問題に自分で答えをみつけることのできる人材」の育成を目指しております。

この目的のためには、(1)基礎技能を高めていくことと、(2)専門性を高めていくことと いう、二つの事柄が重要です。

すなわち、(1)語学などの基礎学力、問題設定能力、情報収集能力、分析・思考能力、プレゼンテーション能力などを高めていくことと、(2)比較文化論という方法論を身につけ、異文化理解能力と異文化への発信能力を高めることです。

こうした観点から、各学年の授業をくみだてています。主に世界の諸地域における文化(特に生活造形)の諸相と、それを支える精神構造・価値観の解明を研究課題とします。

特に近代以降の西ヨーロッパと日本を中心として、諸文化・文明間の接触がもたらす文化の継承・変容を論じております。

その際には、日本を比較の基点とする比較文化論的アプローチを用います。これは、「日本」という文化を知ることによって異文化を知り、また異文化を知ることによって自己の由来する文化のあり方をふりかえるという、複眼的思考のことです。(何かと何かを比べて、その優劣を定めることではありません。)

現代では国際的な文化交流がますます速まっており、儀礼や習慣を支える根底の意識も変容をきたしております。

こうした変化の流れの中に身をおきながら、今一度「生活」というものの在り方を考え直したいと考えております。

◆Research Pursuits

My research subjects so far are as follows: (1) Aspects of "Art for Life's Sake" in Modern and Contemporary Japanese Cultural Scenes; (2) The History of the British Studio Craft Movement (mainly in the field of ceramics); and (3) A Mental Map of Modern Japan: A History of World Views Conceived by Modern Japan in the Period between 1905 and 1945.

◆Educational Pursuits

Comparative Studies of Japanese Culture (Hikaku-Nihon-Bunka-Ron) is an approach to understanding Japanese culture and history in the context of world cultural traditions and world history. Our way of thinking is culturally and historically conditioned. The theory of Comparative Culture suggests first challenging these conventional modes of thinking by making reference to the possibility of other frameworks or cultural values, and, secondly, rediscovering the significance of the culture to which he or she thinks they belong.

◆共同研究例

- ・「京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来」研究会
- ・「柳宗悦と民芸運動」研究会

◆将来の研究計画・研究の展望

「生活造形論」の理論化
いわゆる「情報化革命」が文化のあり方に及ぼす影響の分析

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

- ・情報化社会における生活文化論

◆受験生等へのメッセージ

日本語の「ハンカチ」と英語の"handkerchief"は似て非なるものですが、その違いをみなさんは御存知でしょうか。

「ハンカチ」とは「小型・方形の手ふき布」(『広辞苑』)であるのに対し、"handkerchief"は"a small piece of material or paper that you use for blowing your nose, etc." (鼻をかむさいなどに用いる、一切れのものまたは紙) (Oxford 英英辞典)です。「ハンカチ」も"handkerchief"も一切れの布であることには変わりはありませんが、それらが現実の生活において果たす役割は、文化によって異なることになります。

このような生活造形などを手がかりとして、文化の接触と変容の問題等に取り組んでおります。こうした問題を考える際には、(1)「異文化」を「自文化」に対して説明すること、および(2)「自文化」を「異文化」に対して説明すること、の2点を常に意識することになります。

文化と文化の接触の現場に興味があり、外国語の習得に意欲のある方を、歓迎いたします。